

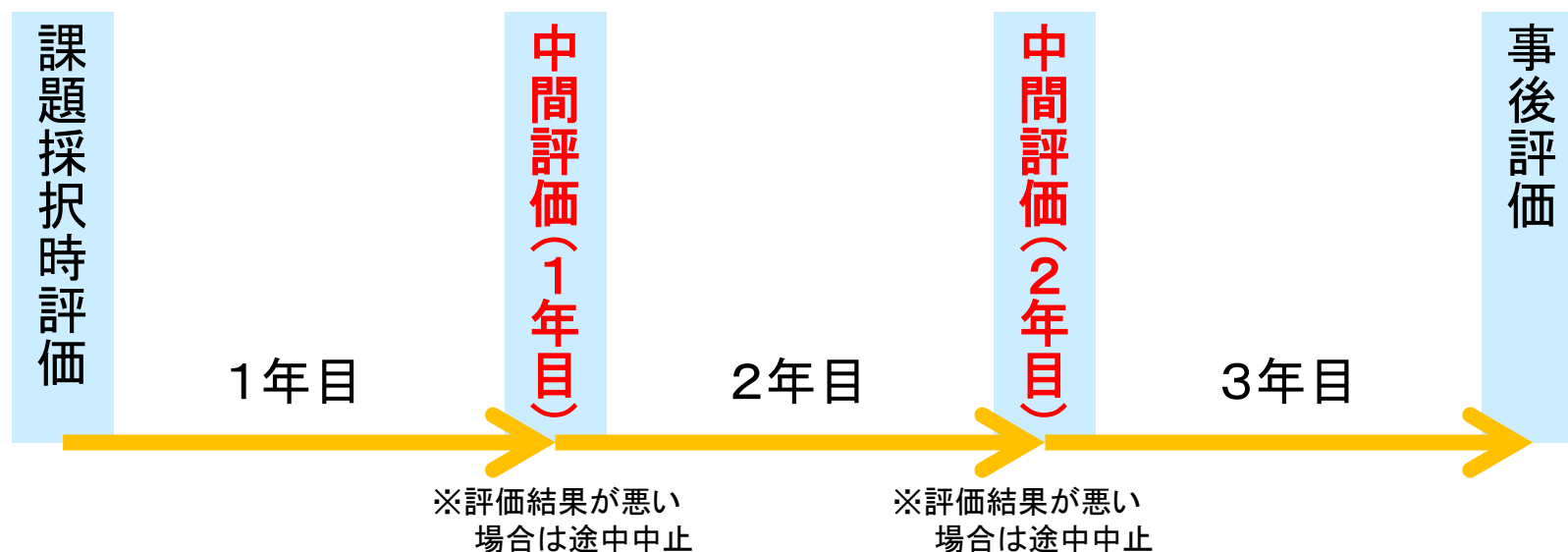
# 平成30年度継続課題の中間評価 について(概要)

1. 中間評価の位置付け及び目的
2. 中間評価のスケジュール(手順)
3. 中間評価の視点及び基準
4. 中間評価対象研究テーマ一覧

# 1. 中間評価の位置付け及び目的

## ■ 位置付け

採択～評価の流れ(研究期間3年の場合)



## ■ 目的

研究の進捗状況や見通しを評価し、研究の適切な実施を図るとともに、次年度以降の研究費の適正化に資することを目的とする。

## 2. 中間評価のスケジュール(手順)

### ① 研究状況報告書の作成 (11月中旬～1月中旬)

### ① 書類の事前査読(書面による評価) (1月下旬～2月中旬)

- 事前査読は実施するが、書面による評価の実施は任意とする。
- 委員からの質問・コメントがある場合は、研究代表者へ事前に連絡。

### ② 研究評価会の開催(ヒアリングによる評価) (2月中旬頃)

- 分科会毎に研究評価会を開催(1課題あたりの時間は、報告10分、質疑10分。4～5時間程度)
- 報告・質疑を踏まえ、分科会各委員は各課題の中間評価シートを作成。
- 各委員からの中間評価シートを基に、中間評価(案)を作成するための審議を実施。

### ③ 中間評価(案)の作成 (2月中旬～下旬)

研究評価会后、分科会長は中間評価(案)を作成。

### ④ 中間評価の決定 (3月上旬頃)

新道路技術会議において中間評価(案)を審議し、合議により中間評価を決定。

### ⑤ 中間評価結果の通知及び公表 (3月中旬頃)

- 研究代表者に書面にて通知
- 道路局ホームページ等において、研究状況報告書、研究概要と併せて公表

### 3. 中間評価の視点及び基準

#### ■ 評価の視点

1年目の研究		2年目の研究	
中間評価の視点	説明	中間評価の視点	説明
研究の進捗状況	研究の目的・目標を効率的かつ計画通り達成するため、研究計画、実施方法、体制(研究遂行における研究代表者の主体性の確保を含め)が適切となっているか。	研究の進捗状況	研究の目的・目標を計画通り達成するため、1年目の評価結果を踏まえ、研究は適切に進捗しているか。
研究の見通し	研究の推進にあたり、研究目標の設定、研究計画、実施方法、体制、共同研究者の役割分担が明確になっているか。	研究成果の見通し	当初計画通りの研究成果が期待できるか(研究の進展により、独創的、画期的な研究成果が期待できるか)。また、研究成果の活用方策が明確になっているか。

#### ■ 評価の基準

評点	区分	説明
A	現行のとおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することによって十分な研究目的が達成される見込みである。
B	現行のとおり推進 (指摘事項有り)	研究は順調に実施されているものの、十分な研究目的を達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C	研究計画を修正の上、推進	このままでは十分な研究目的の達成が期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D	中止	現在までの進捗状況に鑑み、研究目的の達成が困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。

## 4. 中間評価対象研究テーマ一覧

会 分 科	プ タ イ	採 択	委 託 研 究 テ マ	研 究 代 表 者	評 価 分 科 会	
					分 科 会 長	委 員
ソ フ ト 分 科 会	IV	H29	自動運転と道の駅を活用した生産空間を支える新たな道路交通施策に関する研究開発	室蘭工業大学 准教授 有村 幹治	朝 倉 委 員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・青木委員</li> <li>・江守委員</li> <li>・河口委員</li> <li>・久保田委員</li> <li>・佐々木委員</li> <li>・林委員</li> <li>・兵藤委員</li> <li>・道路局担当官</li> <li>・国総研担当研究官</li> </ul>
	IV	H29	対流型地域圏における自動走行システム普及に向けた新たな道路ストック評価手法	東京大学 教授 原田 昇		
	I	H29	質の高い交通時代のモビリティの価値の計測手法開発に関する研究	広島大学 教授 藤原 章正		
	I	H29	観光流動把握を目的とした交通流動推定システムの研究開発	京都大学 教授 宇野 伸宏		
	I	H29	交通事故リスクマネジメント手法の研究開発	愛媛大学 教授 吉井 稔雄		
	IV	H30	AI技術に基づく短期交通予測手法と総合的な交通需要マネジメントの研究開発	広島大学 准教授 力石 真		
	IV	H30	交通流理論とAI学習による非日常の発見とアラート発信	東北大学 教授 桑原 雅夫		
	IV	H30	学習型モニタリング・交通流動予測に基づく観光渋滞マネジメントについての研究開発	東京大学大学院 教授 布施 孝志		
	I	H30	QOLに基づく道路事業評価手法の開発とSDGsへの貢献評価	中部大学 教授 林 良嗣		
ハ ー ド 分 科 会	IV	H29	耐候性鋼橋梁の診断・補修技術の高度化についての研究開発	山口大学 教授 麻生稔彦	那 須 委 員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今村委員</li> <li>・古関委員</li> <li>・下村委員</li> <li>・高橋委員</li> <li>・久田委員</li> <li>・山口委員</li> <li>・道路局担当官</li> <li>・国総研担当研究官</li> </ul>
	IV	H29	部分係数設計に向けた塑性化を考慮した鋼桁設計法の研究開発	長岡技術科学大学 准教授 宮下 剛		
	I	H29	リモートセンシング技術を活用した道路土構造物の維持管理の効率化に関する研究開発	東京大学 教授 古関 潤一		
	IV	H30	道路構造及び空洞特性に適応した陥没危険度評価と合理的路面下空洞対策についての研究開発	東京大学 教授 桑野 玲子		
	IV	H30	地方自治体における道路維持管理業務のための道路構造物に関する情報の利活用方策	筑波大学 教授 堤 盛人		
	I	H30	養生技術・混和材料を活用した各地域のコンクリート構造物の品質・耐久性確保システムについての研究開発	横浜国立大学 准教授 細田 暁		
	II	H30	道路土工と舗装の一体型診断システムに基づいた長寿命化修繕方法の開発	岐阜大学 教授 八嶋 厚		

No.	タイプ	研究期間	研究課題名とその概要		研究代表者	中間・FS 評価結果
29-1	IV	H29-31 (予定)	課題名	自動運転と道の駅を活用した生産空間を支える新たな道路交通施策に関する研究開発	室蘭工業大学 准教授 有村 幹治	B (中間)
			概要	北海道の農林水産業・観光業を担う「生産空間」では、人口減少によって公共交通や物流の維持が著しく困難化している。本研究は、「生産空間」に住み続けられる道路交通環境を目指し、自動運転や道の駅の活用の実装を含む道路交通施策のあり方について研究開発を行うことで、同様の問題に苦しむ全国他地域への貢献を目指す。		
29-2	IV	H29-31 (予定)	課題名	対流型地域圏における自動走行システム普及に向けた新たな道路ストック評価手法	東京大学 教授 原田 昇	A (中間)
			概要	中山間地域の人流・物流ネットワークへの自動走行システムの導入・普及を目指し、道の駅を拠点とする自動運転サービスの実用化を目指した実証実験を通じて、自動運転に対応した道路インフラと地域の小さな拠点となり得る道の駅が有すべき機能を明確化し、自動走行対応型道路ネットワーク整備計画の立案と、ストック評価のためのデータプラットフォーム及び自動走行対応型道路の路線計画評価モデルの開発を行う。		
29-3	I	H29-31 (予定)	課題名	質の高い交通時代のモビリティの価値の計測手法開発に関する研究	広島大学 教授 藤原 章正	A (中間)
			概要	異なる時間価値や時間制約を持つ移動主体が共生する超高齢社会において、交通の時間価値の計測方法を再構築する。この手法を3つの事例研究へ適用し、質の高い交通時代の道路事業の包括的評価手法の有用性についてフィールド実験を通じて検証する。		

No.	タイプ	研究期間	研究課題名とその概要		研究代表者	中間・FS 評価結果
29-4	I	H29(FS) H29-31 (予定)	課題名	観光流動把握を目的とした交通流動推定システムの研究開発	京都大学 教授 宇野 伸宏	B (FS)
			概要	観光流動の把握を主たる目的とし、ETC2.0, 携帯電話系データ, 経路探索履歴データなど様々なビッグデータを利活用し、観光トリップを主とした都市内の移動に関して、そのトリップパターンおよびトリップチェーン流動を推定するシステムを開発する。		
29-5	I	H29(FS) H29-32 (予定)	課題名	交通事故リスクマネジメント手法の研究開発	愛媛大学 教授 吉井 稔雄	B (FS)
			概要	ネットワーク有効活用による安全性向上を目的とし、道路通行時における事故の起こしやすさ(以下「交通事故リスク」)を定量的に評価算定する方法を確立した後、同交通事故リスク情報を活用する交通マネジメント手法を提案・実施して、その有効性を示す。		
30-1	IV	H30-32 (予定)	課題名	AI技術に基づく短期交通予測手法と総合的な交通需要マネジメントの研究開発	広島大学 准教授 力石 真	
			概要	多様な交通サービス供給主体が協調する交通市場の実現に向けて、その要となる短期交通需要予測技術を開発し、開発した予測技術を下敷きとした総合的な交通需要マネジメント手法を提案する。		
30-2	IV	H30-32 (予定)	課題名	交通流理論とAI学習による非日常の発見とアラート発信	東北大学 教授 桑原 雅夫	
			概要	交通流理論とAI学習を用いて、移動体データと気象・地形データ等を融合解析し、リアルタイムに非日常の「発見」と「事前アラート発信」を行う手法を開発する。対象とする非日常は災害時の道路損傷、冠水、豪雪、Gridlock等だけでなく、観光地やイベント時の渋滞も含む。		

No.	タイプ	研究期間	研究課題名とその概要		研究代表者	中間・FS 評価結果
30-3	IV	H30-32 (予定)	課題名	学習型モニタリング・交通流動予測に基づく観光渋滞マネジメントについての研究開発	東京大学大学院 教授 布施 孝志	
			概要	交通ビッグデータを活用した学習型の交通状態モニタリング手法及び交通流動予測手法を開発し、両者を統合して高精度化させた上で、エリア内の交通流動を改善するための適応型交通需要マネジメントスキームを構築する。また、提案手法を観光交通イノベーション地域等で試行し、実効性の高い渋滞対策等の検討に資する知見を提供する。		
30-4	I	H30-32 (予定)	課題名	QOLに基づく道路事業評価手法の開発とSDGsへの貢献評価	中部大学 教授 林 良嗣	
			概要	従来の経済効率性に基づく費用便益分析を超え、働く世代、高齢者、若者等の買物、通院、観光を含む多様な価値観に基づいたQuality of Life (QOL)の視点に立った道路事業評価手法を構築するとともに、道路事業による国連 Sustainable Development Goals (SDGs)への貢献度を包括的に評価する枠組みを開発する。		

## 【参考】研究継続の妥当性評価&lt;中間評価&gt;

A：現行のとおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することによって十分な研究目的が達成される見込みである。
B：現行のとおり推進（指摘事項有り）	研究は順調に実施されているものの、十分な研究目的を達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C：研究計画を修正の上推進	このままでは十分な研究目的の達成が期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D：中止	現在までの進捗状況に鑑み、研究目的の達成が困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。

## 【参考】研究継続の妥当性評価&lt;実行可能性調査（FS）評価&gt;

A：新規課題として採択	実現性は十分あると評価する。よって、次年度から新規課題として採択し、引き続き研究を継続する。
B：新規課題として採択（指摘事項有り）	実現性はあると評価するが、研究目標を十分達成するためには、評価者からの指摘事項に留意が必要。次年度から新規課題として採択し、引き続き研究を継続する。
D：不採択	実現性はほとんどなく、研究目標を達成することは困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。



No.	タイプ	研究期間	研究課題名とその概要		研究代表者	中間・FS 評価結果
29-6	IV	H29-31 (予定)	課題名	耐候性鋼橋梁の診断・補修技術の高度化についての研究開発	山口大学 教授 麻生 稔彦	B (中間)
			概要	本研究開発では、耐候性鋼橋梁の効率的かつ合理的な維持管理を可能とするために、耐候性鋼材の腐食の診断技術および補修技術の体系的高度化を目的とし、診断補修マニュアルの構築を目指す。これにより、耐候性鋼橋梁の維持管理費の縮減が可能となる。		
29-7	IV	H29-31 (予定)	課題名	部分係数設計に向けた塑性化を考慮した鋼桁設計法の研究開発	長岡技術 科学大学 准教授 宮下 剛	B (中間)
			概要	本研究は、断面の一部塑性化を許容した鋼桁の耐荷力特性を実験および解析により把握することを目的としている。さらに、各国の鋼橋の設計基準を分析し、現在の道路橋示方書では具体的に記述されていない、部材の一部塑性化を考慮した鋼桁の設計法の開発を行う。		
29-8	I	H29(FS) H29-32 (予定)	課題名	リモートセンシング技術を活用した道路土構造物の維持管理の効率化に関する研究開発	東京大学 教授 古関 潤一	B (FS)
			概要	リモートセンシング技術(合成開口レーダー[SAR])を活用し、広域の道路土構造物の変状(軟弱地盤・スレーキング材料による長期沈下、アンカーのり面・深礎杭の変状、管理外の土石流・地すべりなど)について、過去に遡ってデータベースを作成することにより、劣化しつつある道路土構造物の性能・対策優先度を評価し、道路施設の点検・維持作業の効率化を図る。		

No.	タイプ	研究期間	研究課題名とその概要		研究代表者	中間・FS 評価結果
30-5	IV	H30-32 (予定)	課題名	道路構造及び空洞特性に適応した陥没危険度評価と合理的路面下空洞対策についての研究開発	東京大学 教授 桑野 玲子	
			概要	路面下空洞の生成要因や拡大過程・陥没危険度を解明し、併せて空洞探査の高度化と空洞特性に応じた適切な補修方法を開発することにより、道路管理者に発信し得る「調査計画・空洞探査・空洞補修に係る一連の合理的プロセス」、即ち道路陥没予防ソリューションを開発する。		
30-6	IV	H30-32 (予定)	課題名	地方自治体における道路維持管理業務のための道路構造物に関する情報の利活用方策	筑波大学 教授 堤 盛人	
			概要	実際の現場での道路維持管理業務そのものの実施体制等や道路構造物に関わる様々なデータ管理の実態を明らかにし、課題を抽出する。その上で、多額の費用を掛けることなく、通常の業務の延長上での道路維持管理業務に関連する各種資料・データを集約し、それらと道路構造物の点検・診断結果等を地理情報システムを用いたデータベースとして構築する方法を具体的に提示する。そして、自治体での実際の導入とその利活用を実証的に検証する。併せて、研究成果活用の継続性の観点から、提示する方策を担う人材育成に関しても実証的に検討する。		
30-7	I	H30-32 (予定)	課題名	養生技術・混和材料を活用した各地域のコンクリート構造物の品質・耐久性確保システムについての研究開発	横浜国立大学 准教授 細田 暁	
			概要	東北地方整備局の復興道路の試行工事ですでに申請者らが構築したコンクリート構造物の品質・耐久性確保システムをベースに、全国の各地域の環境条件、材料事情のもとでの品質・耐久性確保システムを試行工事を通じて構築する。		
30-8	II	H30-32 (予定)	課題名	道路土工と舗装の一体型診断システムに基づいた長寿命化修繕方法の開発	岐阜大学 教授 八嶋 厚	
			概要	舗装表層の供用年数が使用目的年数に満たず早期に劣化が進行し、補修が繰返される区間について、道路管理の観点から、LCC 最小化を目指した、新しい詳細診断システムと抜本的修繕工法の開発を行う。		

## 【参考】研究継続の妥当性評価&lt;中間評価&gt;

A : 現行のとおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することによって十分な研究目的が達成される見込みである。
B : 現行のとおり推進 (指摘事項有り)	研究は順調に実施されているものの、十分な研究目的を達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C : 研究計画を修正の上推進	このままでは十分な研究目的の達成が期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D : 中 止	現在までの進捗状況に鑑み、研究目的の達成が困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。

## 【参考】研究継続の妥当性評価&lt;実行可能性調査 (FS) 評価&gt;

A : 新規課題として採択	実現性は十分あると評価する。よって、次年度から新規課題として採択し、引き続き研究を継続する。
B : 新規課題として採択 (指摘事項有り)	実現性はあると評価するが、研究目標を十分達成するためには、評価者からの指摘事項に留意が必要。次年度から新規課題として採択し、引き続き研究を継続する。
D : 不採択	実現性はほとんどなく、研究目標を達成することは困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。